

28 ある駅の近くの呑み屋

夜更け。

入り口のガラスに轟然と列車が通る光芒が走る。

ガラんとした店の片隅で酔いつぶれているお銀が顔を上げる。

お銀「……いま、何時だい？」

店の片付けをしていた亭主、

「いまのが、十一時半の下りだよ」

お銀「あの若造わかぞう、まだいるかい」

亭主「いるよ」

お銀「……」

亭主「そんなところに居ちや蚊に喰くわれるから、店へ入いったらどうだつて言いったんだがネ。酒呑む訳わけじゃねえから、ここでいいつて……今時の若いもんにしちや珍しいね」

お銀「……」

亭主「どんな訳があるか知らねえが、なんとか言いってやったらどうだネ」

お銀「……ビールおくれ」

亭主「もういい加減にしたらどうだい」

お銀「私が呑む訳わけじゃないよ」

29 枕木積みの上

村上が膝を抱えて坐っている。

遠くで汽笛の音。

お銀「これ、取とってくれ」

枕木が積まれた下からお銀の手がニユツと出る。

お銀「腹がへつたらう、さ、おあがり！」

焼き鳥の串二、三本を突き出したお銀見上げている。

お銀「さ、お取りつたら！」

村上、ポカンとしてビールと焼く鳥を受け取る。

お銀、枕木をよじのぼつて、村上と並んで腰をおろす。

お銀「お前さんにや、負けたネ」

村上「……」

お銀「さ、お食べ！ ビールも冷えてるよ」

村上「そんな事より……」

お銀「わかってるよ……だから負けたって言ってるんじゃないか……でも“私は誰でしょう”じゃないが、本当にヒントだけだよ」

村上「ウン」

お銀「ピストル屋、探してごらん」

村上「ピストル屋？」

お銀「ハハハ、もぐりだね……ピストルの出ものが流れて行くところがあるんだよ……そこで売り買いしたり、そんりよう損料で貸したり……物騒な話さ」

村上「どこだ？」

お銀「知らないネ……ただ、ばすえ場末の盛り場あたりを、くいっ喰詰めた格好してウロついてると、ピストル屋の客引きが袖を引くそでなんて話を聞いたことがあるよ」

村上「……」

お銀「さ、この位でかんべんしとくれ……本当に今日って日は、なんて日なんだろう……殺しの刑事に一日中追いかけて廻されたの、これが始めてだよ……くたくたさ」

そう言い終わると、ゴロンと枕木の上にあおむけに

寝転ぶ。

そしてトンキョウな声をだす。

お銀「ホウ！ 綺麗だネエ！……わたしや、お星様なんていいものあるの、ここ二十年ばかり、すっかり忘れていたよ！」

村上も夜空を仰ぐ。

空には宝石のような星たちが輝いている。

